

# 麻生知子の 自我と他者について

林 花子

明治期に与謝野晶子がつくった4つの文体のうち、麻生知子は「実感軸」を大切にされた戦後詩人の一人である。

「実感軸」の詩人たちは詩と生活を切り離さない。それは言語表現以前の日々の生活のなかに大切な言葉があるという感覚ではないかと思う。たとえば、料理のなかには何かから何かへの言葉がある。出産のなかには誰かから誰かへの言葉があるというように。この感覚の先に何かがあるかここではふれない。が、それは男女という性別に関わらず生活者に開かれていた意識だと思ふ。生活の中に言葉があるとといった上で、麻生の言葉はそれらの日常の時間を切り込んだ領域に向かっていると思える。目の前にあるものを見ているようで、ほんとはそれを無化しているような感じがある？その無化はどこからくるのか。

生きるとはなにかと自分に問いかけてみる。生きることと書くことが関わるとすると、それらが分裂していると感じるとき、この分裂の根っこにあるものはなんだろう。

麻生知子の言葉には誰かが私を呼ぶ声と、私から誰かへの呼び声が対になって同時にひびいている。かつて母が少女の私の名を呼んだ声。少女が母を求めた声。つづが与ひようを呼ぶ声。与ひようという男がつづを呼ぶ声。これらの声はすべて過去のものである。自分の産んだ子が自分を呼ぶ声はかつて母が私を呼んだ声へとつらなる。一つのもののように聞こえる声を、詩人はひとつひとつ測量しそれを今へと順序だてている。麻生にとって今とは、誰にも呼ばれてはいない一点に立つことであるようだ。

私とは誰かと自分自身に問うてみる。その答えのひとつに、強い自我を持つ私がある。その自我はいつからあるのか(ここであやふやにしてはいけないのは、自意識と自我の違いである。自意識は外部から身を守るシエルターに終始すること。しかし、自我とは外部からささってくるとけ

を内部へと受けとめ、殻を自分の内へと差し向ける)。私とは血縁や生まれた時代、教育、それらのなかで性を持たないものとして記憶を重ねてきたものである。そこで性別を持つとはそれら記憶の重なりにとつて未知の点に立つことなのだと思う。つづという名を持つ現在の私。つづの前身である鳥。その時間の流れに抗って麻生知子の言葉はつねに現在から過去に向かっている。

『つづのための断章』で、鶴に刺さった矢を男が抜いたとき、私の鳥は死んだという。私が生きたとき心の鳥が死んだのはなぜか。そしてなぜ麻生は死んだ鳥をも鳥は鳥だといえるのか。ばくぜんと疑問だった。それは死に対して死のむこうにも鳥という規定を持ち込むことだと思えた。死とは、鳥であった私のしるすすらもなくなることではないのか。死がひとつのしるすの所有でないなら。

麻生にとって死とは、私が死ぬことでなく、心の中の鳥が死ぬという意味である。鳥は自我によつてつくりあげたものではなく、誰かから贈られたかたちにならないものを、その誰かに分かるように言葉を与えたものだと思える。鳥とは、誰からも触れられることを拒み、誰とも話すことのできない心だろう。それならば鳥とは、私が生きている以上は生け捕りにされているにすぎないのではないか。鳥はなくならない。無瑕であった鳥の体にはもろい言葉が繋がれていて、外部に触れるたびに毛の言葉が砕け落ちてゆく。麻生はいう。この内部と外部の反転のような感覚はどこからくるのだろう。

“かこのなかのとりが痩せると、私の体が重くなる”反比例の関係が鳥とつづには密接にある。鳥が死んだらひとつになるなどのなだらかな移り変わりではない。

『つづのための断章』において麻生知子の言葉は、一文一文がじゅずのようにつながっている。第一文が問題提起として置かれる。一文一文で物語が進行しているのではない。紛れもなく私としてあるものへの疑問や仮定がくり返される。自我によつて一文一文のかたまりの底に穴があき、その軸同士をほそいひとつの糸でつないでいる。自我は詩の周囲にあつて、それらの思いの軸へと方向づけられている。

泥眼

みひらいてそのときあたしは鳥であった紛れ

もなく ひとつとは似ても似つかぬ昏い穴におしひしがれ ひとつすじの血のように仮面の裏で輪郭は溶けて あたしの暗がりへと傾いて 面は曇つても微笑むでもなく いつまでも面の表情にあたしはこたわりつづけていた 鳥に背反きおまえを欺いてほんのいつとき華やいだのちあたしは生あたたかな昏い空洞となる 膝を固くそろえてはじめて面をつけたおののきも 何でもないと思えた決意がおまえのためであつたとさえないまは定かではなく 金色に両眼潰してこぼれるようにつづは面をあげる 誰れにも呼ばれてはいなかったのに

この詩の一文一文の中心には昏い、憂い、微笑み、おののき、などの感情が大切にされている。仮面の底にある感情を踏まえた上で、その揺れのさらに底にある、紛れもないもの、けれど定かでないものにと降りている。鳥を仮面の裏に抱えた女が自分の輪郭をなくして「生あたたかな昏い空洞となる」という。この空洞とは何だろう。空洞とは、なにもない空っぽなものではなく、そこには湿度とか温度とかがなだれていつばいになっている。麻生は自我によつて言葉を発しているが、その自我自身が濁りなく透明になることを願っている。わかりづらけれど、自我や感情の殻によつてしめされた空洞には、同時多発的に他者から刺さってくるたくさんの言葉で満ちているのではないだろうか。

そこで自我の私はいなくなつただろうか。つまりは、麻生の他者との関わりは小説の中のソーニヤのような“踏みこえ”か。わからない。今思うことは、自我もまたなくなつたのではないか。私がいけないどころかびつしりと自我にみちて、私でない人称にむかい、あなたは誰？と問いかえしたのではないか。そのとき私と私ではないものは交換可になつただろうか。それは自我なのか。しかしそれは戦前までの女性たちの生きた道と何がちがうといえるか。

いずれにしても、私とは誰かと問うことは一方通行ではないようだ。他者とは誰なのかという問いと切り離すことができない。麻生知子は自我を持つ私を書くことで、私ではない他者へと身を向けた詩人ではないかと思つている。

\* Web用の内容見本のため、実物とはフォントが異なります。

\* この他の論考は紙媒体の「えこし通信」創刊準備号(無料)でご覧頂きたいと考えております。

(えこし会広報室)